

を繰返すと云ふ事もござります。

皮膚の色光澤にしても、少し病氣であれば色光澤の赤い色が無くなつて、速に衰弱の模様が出て来て皺が出来るとか或は尋常に異なつた色光澤を現はす、重症の腸加答兒でもあつて、多く下痢でもした子供は色光澤も悪く、脂肪分も缺けるから眼も早く凹むとか、色も悪く、手足も血液の循環が悪くなつて冷たくなる、黄疸のやうな病氣ならば結膜とか、皮膚にしても唇にしても黄色を呈して來ますし、又傳染病の格魯布の呼吸困難のつゝ、時としても或は血行病でもあるものは「チアノーゼ」(紫紅色)でも現はるゝとか、神経系統の疾病には皮膚の知覺が過敏になつて何處に障つても痛いとか、又麻疹とか猩紅熱とかさう云ふものになれば斑點狀に赤い色が出て來る、兎に角皮膚の

色光澤も一のより所となる。

(以下次號)

或母の日記 (第三回)

無名氏

生後七八ヶ月間の記事

(即ち三十四年四月より五月に至る)

三月中旬、母の實家に行き滞留すること一ヶ月、四月十二日に歸り來る宅につききて、父や婆さんを見て知らぬと云ふわけか泣きて大に困らせた。次ぎの日平生親しくゆき、せる某の家に至る。又人々の顔を見廻はして泣く。此くの如くして五月の末に至る、六月に入りてより他人を見ても泣かぬやうになれり。

母の實家より人形三つがらゝ布袋等の玩弄物を貰ひ來る、宿の婆さんよりもがらゝ一つ貰

ふ。

四月十六日（生後二百日）體重を計る、壹貫六百四十目なり、此頃より暖氣加はり室の内さびく戸外は暖かにして心地よろし、故に室内にあるときは機嫌わしくして泣き野外に出づれば喜びて笑ふ、つとめて戸外に連れ出づるやうになせり。  
 十九日婆さんが銅貨大の菓子ばんを預けしに半分程吸ひとしたり。

二十二日はがき其他の文字を見て何か讀むまねをなし大に笑はせたり。

此頃より牛馬を見て嬉しがり、又雀大猫の鳴き聲を聞きて喜べり、殊に子供の遊び戯るゝを見るときは大に喜べり。

五ヶ月目にて獨坐する事できたりしが、二ヶ月を經たる只今にては、頗る上手になり、たをれん

として調子をとれたをれずなりぬ。（凡そ三十分）頭其他を物に打ちても少々事にては泣きし事なし頭が餘程堅いと話しあへり。

四月二十九日夕食の側にありし膳を引張り、又は押出しなどす。

五月四日大根漬を吸ふ、又始めてがらくをふりてならず、此頃の眠る時間は凡そ十二三時間なり。

六日仰向きより腹匍ひに起きかへれり。

八九日頃より他人の出したるものを兩手を出して取り直に口に入る、過ちて下にて落しても知らずして手のみ口に入る。

此頃毎日だゝを云ふて母を苦めたり。

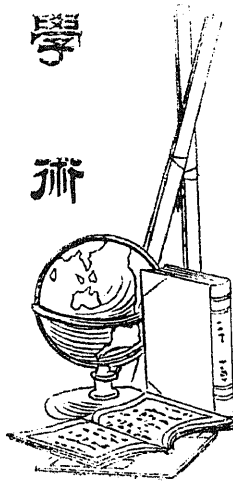
五月の中旬よりお出と呼べば兩手を出す事を覺えたり、此頃母の見ぬ間に三尺程外にすり出した

り。

十九日在郷重人の演習を見物に連れ行きたり

ひとへなる蟬の羽衣夏は猶

うすしといへどあつくぞありける



夏の海邊

東海生

海岸のひろくとした處の、波靜に白砂を洗ふ  
磯のほとりて、散歩するのは、實に愉快である。

殊に夏の海岸と來ては、又一層である。海岸は山  
手の方や町中よりも、餘程涼しくつて空氣が清潔  
であるのだから、身體の爲になることは、非常な  
もんだ。夏を海岸で暮す丈でも、この様である  
が、此上毎日二三度も海水浴をやるものなら、御  
飯のいけることは、常の二倍にもなり、身體の色  
は、赤黒になつて、丁度、船頭の子供を見た様に  
なる。

身體の色の黒くなるのは、衛生上大變にいゝの  
である。例合ていへば、家の中とか、木蔭に生長  
する草は、青白い、なよ／＼した形をして居るに、  
日わたりのよい所に生えてる草は、丈夫で黒青い  
色をしてると同じことである。

夫から氣分がさわやかになつてくる。これまで  
東京のような、家の密にこみあつてる、塵芥だら